

毎月1回20日発行

(昭和31年3月28日第三種郵便物認可)

やま博物館

編集責任者 大町山岳博物館



日本アルプスのぬし

—上条嘉門治—

10月はウェストンと共に、北アルプスを開拓した人として知られる上条嘉門次が、亡くなってから40年を数える。ウェストンの言う「この老練な山案内者」には、山で鍛えた独特の風格があった。山への魅力は結局、人への魅力となって集約され、多くの歌人や画家は、これ等の人たちを通じて、はじめて山を知った。美しく豪壮な大自然は、美しく健康な人の心をはぐくむ。私たはち北アを拓いた人たちの、素朴ななかに培われた不屈の心をもとに、新しい山への道を拓かなければならない。

(写真はウェストン夫人を案内する在りし日の嘉門治、3人目は通譯、愛犬コゾーも従っている。)



日本アルプスを世界に紹介したウエストン氏は、明治24年初めて槍ヶ岳に登り、その後数回上高地を訪れ、赤沢岩小屋又は坊主の岩小屋を根拠地としてこれに登った。写真はウエストン夫人と中央は通訳、左が嘉門治。穂高の石室前においてウエストン氏の手による記念撮影。



ウエストンより嘉門治に送られたアルバム。表紙の裏に「我が古き友人上条嘉門治君ニ日本アルプス登山の記念トシテ写真帖ヲ進呈ス」西暦千九百拾四年四月、ウオルター・ウエストンと記されている



嘉門治愛用のナタとヤリ、護身のために常に身につけていたものでヤリは長柄を具える。ナタは当時の狩猟に欠く事のできないものでこのナタ一挺でクマと樺斗の末、取りおさえたという話もある。

嘉門治を偲んで

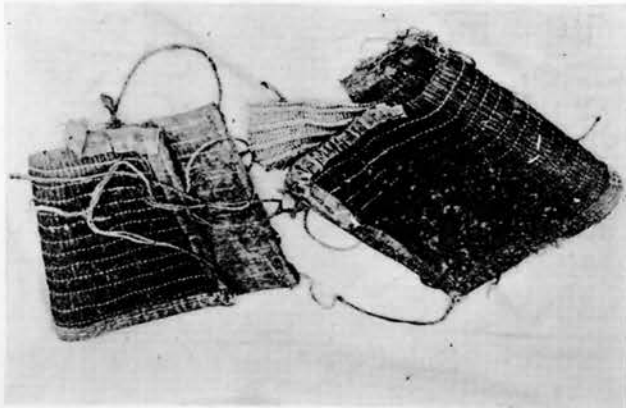
北アと生活を共にした人々

「日本アルプス探検醗酵時代」(鳥水)、それにつづく「日本アルプス黎明期」があるとすれば、その時代をかくすために陰の力として貢献した人々を忘れることは出来ない。

明治時代、大正時代初期には奥深い山岳や谿谷を知っている者はなく、まして山の案内人を正業としている者は一人もなかった。唯アルプスのもたらす豊かな幸を求めて鉄砲と釣竿を肩にして山野を跋涉した人々だけは岳を知っているものであった。北アと生活をともにするこれらの人々は山腹をぬって流れる溪谷を中心に活躍の舞台を展開していた。梓川溪谷に上条嘉門治があり中房溪谷に小林喜作、高瀬溪谷に遠山品右エ門があった。中でも上条嘉門治は上高地を基地とし、老練なる山岳人、(ウエストン)として、この地を訪ねる内外登山家の案内をつとめ日本アルプスを世界に紹介し登山者人々の生活に近づける重要な位置にあったのである。

嘉門治の人となり

弘化4年10月14日南安曇郡安曇村有馬又八氏の次男として生まれ明治4年上条姓に改めた。幼少の頃より父につれられ徳本(とくごう)峠附近に狩猟に行き、文久3年暮林の見廻り人夫という名儀で上高地に入り、彼の上高地での生活が始まった。明神池の畔に小屋をたて(後に嘉門治小屋と呼ばれる)夏はイワナを多はクマやカモシカを獲って生業とし、そのかわら「山案内人」として活躍したウエストンを穂高に案内したのは彼が46歳の年であり、上高地に住でからおよそ30年にもなんんとする年であった。猟師とし、案内人とし、登山の名手としての彼の生涯は大正6年10月26日永遠のせらぎを峰々にこたまさせる梓川の清流のほとり嘉門治の自宅で静かに終えんを告げた。彼と交った人々は敬愛と信頼のなかに数々のトビツクを伝え、これらの話は伝説的な物語にまでなつて未永く伝えられて行くであらう。



しなはばき シナの皮で作られたハバキであり、表面にはシブがぬつてある。雪がつかず、水がしみこまない点が良いとされている。



横メンツとシルデンコ 右は飯を入れた横メンツ（べんとう箱）。左は汁物（主として味噌、漬物）を入れて山へ携行したシルデンコ

嘉門ぢいにまつわる話

彼は粗末な村田銃を肩に山をかけまわり、クマを60頭も打ち取ったといわれ、ある時は熊の穴の口許で格闘して打ちとったという話もある。魚釣りは飯より好きでイワナを取っていき1日に2円や3円は稼げた。彼は一徹だといわれる。イワナを買いに来た客にマスが無いから売れないと断わり、目分量で売って少なけりや且那衆の損だ、多けりやわしの損だと言ったそうである。水島鳥水氏は『爺は小さな岩魚を生のままでもペクリと呑む。「いを（魚）は、これでのうてはもうない」と澄ましている。……原人の如くであり、生まれたまゝの自然児である』といっている。彼の登山技術も有名である。徳高、槍ガラ場を登山家を先に歩かせる。誤って頭上へ石を落とすと、実に巧みに身をかわし、それを除けたそうだ。濃霧や始めてのルートで方角が一向見当がなくなると、彼は冷静な態度で霧の晴れ間を見はからって、特異な鋭い山カンを働かせた。山の案内人としてはその実意が買われた。山頂ちかくの岩壁でつらいとした人を背負って麓までおりて来たために助かった人もあった。あるいはおそい来る烈風のなかをヤミ夜をついて山頂めがけて救援にたったこともあった。又遠山品右エ門を嘉門治ははめて「品右エ門おっさ程、岳に明りい衆（しゅう）は、めったにあらずかい」といっていた。

彼は山男としての優れた天分と共に、非常に純情で後輩の指導を懇切にし、猟師仲間から先輩として又人格者として慕われ尊敬されていた、彼らは嘉門治と爺を一つの言葉に縮めて「嘉門ぢい」と呼んでいた。

嘉門治時代の山道具

嘉門治を始めとして北アと生活を共にした人々の山支度は雪の尾



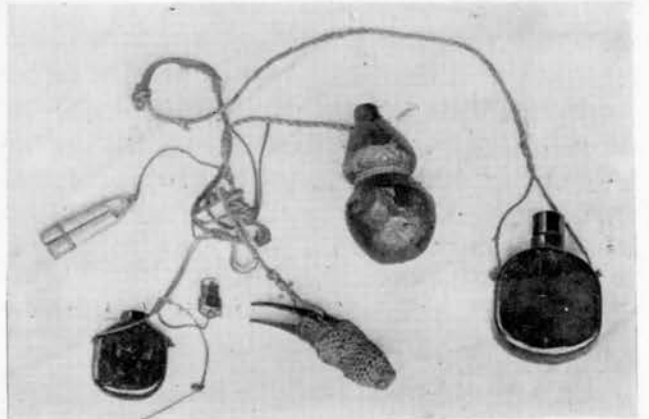
背中あて カモシカの皮で作られた背負い袋、山へ入る時に道具、食料などを入れて背負って行つたもので現在のルツクに相当する。

根張りを3日5日とわたり歩くにたる必要十分な食糧と防寒具で身がかためられていた。カモシカの肉のくん製、カモシカの生皮の袖なし、或は短筒の村田銃など何れも彼等自身の経験と考へによる改良工夫がほどこされ、同じ用途に使用される道具にも個人々々の個性がにじみでている。

これらの道具を眺めていると心ゆくまで愛玩している彼らの姿が浮んで来る。



火打ち 鉄片、石、ブナの木の炭ごな（木製の小筒入り）の三つて1組をなす

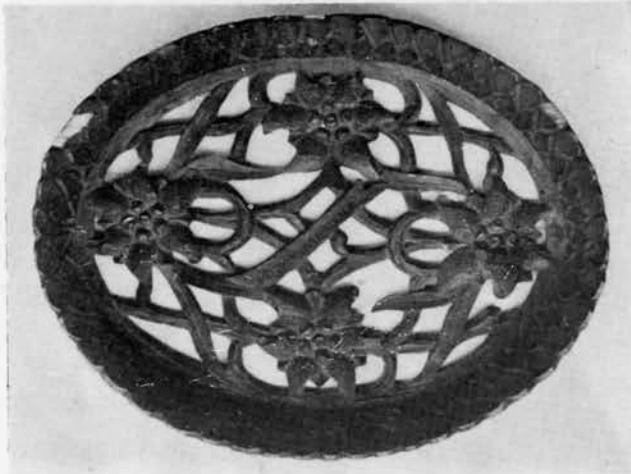


肩かけ カモシカ、クマなどの狩獵に使用した火縄銃の附属品一式 火薬入れ、弾入れ、火なわ入れ、雷管入れに分かれている。

山の土産品を研究

＝本館の工作室で試作も＝

山の土産品として、もっと親しめるものを作り出そうと、本館では8月からこの研究にとりかかりました。まず手はじめに、欧州各地の『山の土産品』の収集をはじめましたが、このごろその第一陣としてスイスの資料がとどきました。本館では移転後工作室で試作にとりかかりますが、来春からは土産品陳列所を設け、国の内外の代表的なものを公開するとともに、郷土の土産品は即売する計画をたてています。いま研究されているのは、意匠、製作、技術がすぐれたもので長つゞきするものを中心にしています。土産品についての研究機関が、これを機会にぞくぞく発足することを、本館では強く望んでいます。【写真はスイスの土産品のひとつ。エーデルワイスが刻まれています。】



(今月の寄贈) アオゲラ1体 大町市常盤西山益雄、西山久雄氏
 ヨタカ2体 大町市仁科町伊藤五十二氏、キジバト1体 高見町長谷川義男氏、ヨタカ1体 神楽町青木和男氏、オオヨシキリ1体 九日町長沢源氏、木ウス 九日町千村万次郎氏、キジ雌1体 仁科町中村豊氏、カワセミ(幼体) 大町市社上条浩氏、イタチ1体 社矢口康雄氏、ウスバカゲロウ1匹 大町市山田準作氏、石ガメ1体 木崎平林公氏、ヒクタイナ(幼体)3 関西電力事務所西牧豊氏、ノウサギ1体 大黒町山岡隆氏、古文筆23冊、火繩銃一丁、砲術印可1巻外 社久保村茂一氏、折タタミ式スキー1台 東京明石製作所 斎藤益太郎氏、ヨタカ1体 南原町田中貴郷氏、ウサギゴウモリ(幼体) 神城村三日市場吉沢寛氏、アブラコウモリ1体 高根町川上賢氏、さざ波の跡の化石3体 信大地理学教室田中邦雄氏、ヨタカ1体 高根町合津いづみ氏、アカエリヒレアシシギ2体 南原町太田智子氏

第二次全国山岳会パッチ募集

昨年10月本館では全国山岳会のパッチを収集することになり、その第1回分として約50部会から寄贈をうけましたが、本年度も引きつゞき御協力願うことになりました。3年計画で全部の収集を終る計画ですが、各山岳会でまだ當館に寄贈または譲渡願えないところがありましたら、何卒御協力下さるよう御願ひ致します。永く當館に保管し一設山岳愛好家に公開したいと思います。御送り下さる折には、山岳会名、会長名、部員数、活動状況などもお知らせ下さい。来年度の夏山には新装なった博物館で、北アルプス夏山展覧会を開催する予定ですが、その折には是非全国山岳会パッチ展を併せて行う計画です。

お知らせ 本紙の購読を御希望の方には実費1部10円でおわけします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます
 大町山岳博物館後援会

山岳会

創立は昭和7年。當時はこの型ではなかったが、その後このパッチに変えた。国鉄大井工場といえは有名なもの、山岳部だけでも今、国内で一級に属する部員は約50人はいる。このほか山歩き程度の部員は150名もいる



国鉄大井工場山岳部

案は靴袋ムガーにTokyo Oikoo Mountain Clubの頭文字T O MCを配したものだ。同山岳部の伊藤賢三氏は1952年、ヘルシンキに行った折、スイスのチューリッヒでアルプスに登ったが、その折採集したエーデルワイスは本館で寄贈をうけ、陳列されている。

【博物館だより】8日20日 カモ24時間視測(駅前禽舎)、居谷里植物採集(南高校生物班) 21日大町市社会調査打合せ 25日自記雨量計設置打合せ 26日北ア雨量視測鳥帽子隊出発(高橋、千葉、福島) 29日国立公園資料整備、鹿島槍山麓スキー場開設下見(福岡氏一行) 9月2日雨量視測鳥帽子隊帰館 3日雨量視測針ノ木隊出発(海川、平林、柳沢、松沢) 4日市総合社会調査開始、山のみやげ品研究会 6日第6回山の歌声(市公民館) 山小屋調査打合せ 10日大町市記録映画録音構成 12日市記録映画試写会、雨量視測針ノ木隊帰館 15日～17日居谷里調査出勤(気象、植物)文化祭準備委員会 18日新館の展示計画打合せ(会議室)

博物館後援会員募集

博物館後援会の会員を募集しています。年額千円を納める団体ならびに、年額三百円以上を納める個人を正会員といたします。会員には次のような特典があります。

- 1、博物館の諸指導行事を通知し参加の便をはかる。
- 2、毎月『やまと博物館』を配布する。
- 3、団体には講師、指導者派遣の求めに応じる。
- 4、博物館に支障のない限り、博物館の資料(標本、図書、写真、図版等)器具の借り出しをあっせんする。
- 5、その他博物館で種名同定、研究指導など諸種の便宜をうけるあっせんをする。
- 6、いつでも博物館を無料で観覧できる。

編集後記 本号は北アルプスを拓いた人として名高い上条嘉門治を中心に、当時のガイドの生活を偲ぶことにした。この断片的な資料から開拓者の面影を察していただければ幸いです。嘉門治の写真は當館で保管しているものの一部で、孫にあたる孫人氏の協力によるところが多い。▲北アは既に初雪を迎えようとしている。今年の夏山から、われわれは明暗さまざま場面を見聞した。原子力時代の出現は、かえって、ひとびとの大自然への接触意欲を増したかつての開拓者は、今日の姿を想像だにできなかったことだろう。▲山の大衆化は喜ぶべきことにはちがいない。しかし、高嶺に咲く1本の草花にも山の生命は宿る。あのおとなしいカモシカは、なぜ人の姿を見ると遠い谷間へ姿を消すのだろうか。▲とにかく毎年、山客は変わりつゞある。日本は狭い。そして人の心も狭い。これが夏山のわれわれに示した教訓だ。

やまと博物館	No.9	1956.9.20発行
編集発行人	大町山岳博物館	
発行所	大町山岳博物館後援会	
	長野県大町市神楽町電話211番	
印刷所	信州印刷株式会社	